

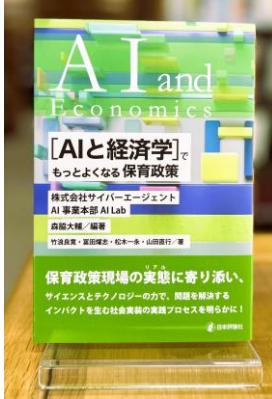


議会図書室からのお知らせ

今月の新着図書
R8年1月(一般用)

『[AIと経済学] でもっとよくなる保育政策』

森脇 大輔【編著】竹浪 良寛 他【著】/日本評論社(2025/9)



幅広いAI技術の研究開発を目的に設立された「AI Lab(アイラボ)」が、科学と技術の力で、自治体と共に保育現場の問題解決に挑む！「AIと経済学」を駆使し、待機児童問題などを解決に導く行程とは？

『2025-2040 変わりゆく医療のアウトラン～地域医療構想・医療DX・かかりつけ医・就労者不足・働き方改革の予想図』

武藤 正樹【著】/医学通信社(2025/7)



医療・介護制度改革は待ったなしの状況。この先15年の変化の潮流をどう読むか、具体的に何がどう変わるのか、医療機関はいかに対応していくべきなのだろうか？医療の未来を的確に指し示す、新たな時代のロードマップ。

『生きとし生けるもの～入管ウォッチャー15年の面会報告』

西山 誠子【著】/風媒社(2025/7)



約10年に渡って名古屋出入国在留管理局に通い、収容されている外国人と面会を続けてきた著者の記録。人権保護の及ばない組織の素顔と、囚われた人々の真実とは？「国境は人間の尊厳の境界ではない」との思いが綴られる。

『水の戦争』

橋本 淳司【著】/文藝春秋(2025/9)



「水資源の権者が、国家から企業へと移行し、新たな『地政学的リスク』が生じている」と本書は指摘。半導体、AI、データセンター等の産業に絡む「水の戦争」とは何か？なぜ、水が戦略的資源となるのか？その実態に迫る。

『高齢期における格差問題～累積する有利・不利とウェルビーイング』

杉澤 秀博・原田 謙【編著】/勁草書房(2025/11)



日本の高齢者にはどのような「格差」が生じているのか？人々の生活をデータから把握し、累積的に格差が生じるメカニズムを探る。階層、性別、年齢等が個人のウェルビーイングに直結しない社会づくりを目指す書。

『世界は知財でできている』

稲穂 健市【著】/講談社(2025/8)



AIで様々な物を作り出せるようになった現代。便利な反面、作成した物が、他人の権利を侵害してしまうリスクもある。そんな「知的財産トラブル」を防ぐための基礎知識を、身近な例でわかりやすく解説！

『ニッポンの移民～増え続ける外国人とどう向き合うか』

是川 夕【著】/筑摩書房(2025/10)



労働力不足や世界情勢を受け、日本への移民が増える一方、排外主義的傾向の台頭も懸念されると著者は語る。移民政策の歴史と未来を考察し、誤解や不安を取り除き、移民を巡る議論に一石を投じる。

『アメリカの中東戦略とはなにか～石油・戦争・同盟』

溝渕 正季【著】/慶應義塾大学出版会(2025/8)



アメリカはなぜ中東に介入するのか？湾岸戦争、イスラエル・イランへの直接的関与の政策決定を駆動する力学は何か？アメリカの中東関与政策の変遷とダイナミズムを分析し、通底する戦略的論理を読み解く。



新着

『エンタメビジネスの教科書 ～対談編』

中山 淳雄・慶應義塾大学教養研究センター【編】
/慶應義塾大学出版会 (2025/11)



エンタメビジネス各界の一線で活躍するプロデューサーやクリエイター11人と、エンタメ社会学者である著者との対談集。彼らはいかに「創造」を「ビジネス」に転換できたのか？その極意を解明する。

新着

『ポップカルチャーによる地域創生のマーケティング～超えろ3年の壁！』

川又 啓子・田嶋 規雄 他【編著】/千倉書房 (2025/3)



熊本地震後、復興の象徴とされた「くまモン」の活躍、能登半島地震の災害復興でのポップカルチャーを活用した地域再生など、地域活性化にどのようにポップカルチャーが関わっているか、その仕組みと事例を検証する。

『クリエイティブ・ジャパン戦略 ～文化産業の活性化を通して豊かな日本を創出する』

河島 伸子・生稻 史彦【編著】/白桃書房 (2024/6)



日本の「クリエイティブ産業」が持つポテンシャルを最大限に発揮させるための政策・施策、現状と可能性について分析、検証する1冊。気鋭の研究者・実務家が、多様な専門的視点から、今後の課題を提示する。

『キャラクター大国ニッポン ～世界を食らう日本IPの力』

中山 淳雄【著】/中央公論新社 (2025/5)

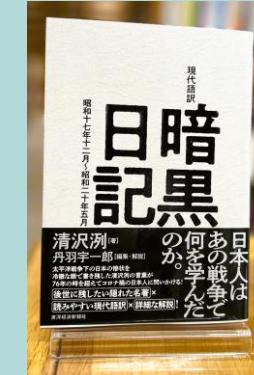


日本のアニメ・ゲームなどのキャラクターが世界中にファンを作り、多大な経済を動かすとされ、今注目を集めている「IP(知的財産)ビジネス」。人気キャラクターが生み出した経済圏を紐解き、ビジネス成功のヒントを探る。



『現代語訳 暗黒日記

～昭和十七年十二月～昭和二十年五月』



著：清沢 別 解説：丹羽 宇一郎/東洋経済新報社
(2021年12月)



紹介者：鈴木 敦子 委員
リベラル群馬・高崎市選出・2期

世の中に対する冷静な批評が時に痛快で面白くもあり、と同時に、現代と酷似した状況に戦慄が走ります。なぜなら、この本が紹介する「日記」の舞台は太平洋戦争の真っ只中。軍国主義に陥った政府と、その統制下におかれたメディアや国民の姿、異論や反論を許さない社会の空気は、本来は繰り返されてはならないはずなのに、どこか今に通じるものを感じるからです。

著者の清沢別は明治生まれの外交・政治評論家。米国勤務経験があり、国内外の情勢に詳しく、反戦主義を貫いた結果、戦時下で迫害を受けました。1945年5月に戦争の終結を見届けことなくこの世を去っていますが、戦後の平和を願い、その年の元日に「当分は戦争を嫌う気持ちが起こるだろうから、その間に正しい教育をしてはならない」と記しています。

戦後80年。さまざまな歴史認識が叫ばれる今だからこそ、当時を生きた人のリアルな証言や思いに立ち返る必要があると思います。ぜひ現代人の必読書として手に取ってみてください。

▶ 次号では、追川 徳信 委員におすすめしていただきます！